

# 興安嶺南山地の経済構造

—— ハラトクチンの経済の分析を手掛かりに ——

吉 田 順 一

はじめに

1. ハラトクチンと興安嶺南山地の自然環境
2. ハラトクチンの集落と経済の概要
3. 牧畜
4. 農耕
5. 狩猟
6. 木材伐採と木工

おわりに

## はじめに

ハラトクチンとは、満洲国興安局が1939年に調査した集落であり、その調査報告書にはハラトクチン部落と称され、川の名ともされている<sup>1)</sup>。南満州鉄道株式会社（満鉄）が1937年に実施した調査の報告書には「ハラタクチ〔ン〕」「ハラドチン」「哈拉特沁」などと表記されている<sup>2)</sup>。だが今は山の名としてのみ使われている<sup>3)</sup>。ハラトクチン部落は、中国の土地改革以後の諸政策の中で集落の名でなくなり、曲折を経て近年バヤンボラク（bayan bulay）となった。この集落は、現在中国内モンゴル自治区赤峰市アルホルチン旗の北部にあるバヤンウンドル・ソムのバヤンボラク・ガチャーの中心地である。ハラトクチン川は、今はナリン川（narin youl）といわれている。集落は1939年も今も、ナリン川とハヒル川の合流点付近の谷間にある。かつて家々の多くはナリン川側にあったが、今はハヒル川側に存在している。

私とブレンサインは、この土地の1939年と現在の状況を比較した調査と研究を、ここ数年行ってきた。また私はそれ以外に、1995年以来、バヤンウンドル・ソムの南のハーンスム・ソムやホント鎮などに対しても、繰り返し調査をしてきた。本稿は、これらの調査結果を主に使って、ハラトクチンの経済構造を明らかにしようとするところから出発した。しかし次節で述べるように、ハラトクチンと類似した自然環境の地域が、興安嶺南の山地に広大に分布している。そこで、そこに共通する経済構造を見出すことができるのではない

か、このように思い至った。そのきっかけは、フルンボイルの今のエヴェンキ族自治旗の南部に暮らしてきたオールド族に対する研究であった<sup>4)</sup>。そこは興安嶺北の地であるが、環境が興安嶺南と似ている。ハラトクチンの経済を調査してみると、両者の経済に共通するいくつかの点を見出すことができた。そこで、ハラトクチンだけではなく、それと類似した環境の興安嶺南の山地を一体のものとして捉え、その経済構造の共通性を見出すことを考えたのである。本稿の目的は、この点にある。

この興安嶺南の山地に帯状に広がる〔山岳〕森林ステップ地帯に暮らしてきたモンゴル族の間にみられた経済構造を解明するにあたり、ハラトクチンをまず検討する。そこには、満洲国興安局の実態調査による20世紀前半のよい資料があり、また私たちの最近の調査から得られた資料も比較的多いからである。これらの資料を主に使ってハラトクチンの経済の諸側面を個々に分析し、そのつど興安嶺南の山地の他の地域のそれも検討する。このようにして全体として興安嶺南の山地の経済構造が明らかになるように努めたい。それによって内モンゴル東部の広い部分を占めるこの地域のモンゴル族の経済構造の特徴を浮かびあがらせたい。

## 1. ハラトクチンと興安嶺南山地の自然環境

ハラトクチンは、山水草木に恵まれている。中国の草地学上「興安嶺山地丘陵湿草地性ステップ亜区」の「大興安嶺南部丘陵平原バイカル＝ハネガヤ小区」に位置する。この亜区は森林ステップ地帯で、この小区には、興安盟のウラーンホト市、突泉県、ジャライト旗、ホルチン右翼の前旗と中旗、通遼市(旧哲里木盟)のジャルート旗、ホーリング市、赤峰市(旧昭烏達盟)北部のヒシクテン旗、林西県、バーリン右旗、バーリン左旗、アルホルチン旗が含まれる<sup>5)</sup>。ここでは、年平均気温は $-2\sim 6^{\circ}\text{C}$ 、無霜期は90～110日、年平均降水量は350～500mmである<sup>6)</sup>。

より細かにみると、アルホルチン旗北部は、「軟らかい土をもち、バイカル＝ハネガヤ・ヒメカモジ草・シベリヤ＝ヨモギキクの生える湿草地性ステップ」に分類され、植生は、山地の湿草地性ステップを主とし、低山の地区は森林の縁の湿草地である。山地の北斜面には長白樺、山楊とモンゴル櫟の二次性森林区を生長させる。山地の湿草地ステップに優勢な灌木としてはハシバミ属やシベリヤ杏等があり、灌木が覆う割合は15～70%である。草の密度は濃く、地表を覆う割合はふつうのところでは46～80%であり、最高のところは90%に達し、草丈も30～60cmに達し、生えている草の50%程度は優良牧草であり、暖かい季節に、1ムー(15分の1ヘクタール)当り干草77.85kgを産する。これらによって、この地域は、牛を飼うのを主とし、羊の飼育を積極的に発展させる潜在力が非常に大きい<sup>7)</sup>。満鉄も、1937年に牧野を調査して、ハラトクチンが牛馬の放牧に適すると記した<sup>8)</sup>。

ハラトクチンは、北から南流するナリン川が北西から南東流するハヒル川(qakir youl)に合流する地点にある(ハラトクチンの位置については図1参照)。それぞれの谷間と両

側の山々に牧地があり、ハビル川は徐々に遡って興安嶺頂付近に至り、マルガン峠 (malyan dabay-a)<sup>9)</sup> を越えて西ウジウムチン旗に入る。二つの川の流域の山々には森林が発達しており、ハビル川沿いの道をしばらく遡ると国营ハン山林場の範囲に入る。1908 (明治41) 年にハビル川を遡って西ウジウムチン旗に入った鳥居龍蔵は「河畔には人の丈より高き柳樹立ち並び、恰も柳のトンネルを行くが如き感あり」と述べたが<sup>10)</sup>、今もそのような場所が残っている。かつて山林はずっと豊かであったという。峠の西方のボルガスタイ川流域にハラトクチンの広い夏营地があったが、西ウジウムチン旗との旗界紛争が起り、多くの部分が西ウジウムチン旗のものとなった結果、ハラトクチンの牧民は牧地の不足に苦しんでいる。

アルホルチン旗北部は、モンゴル国でいうハンガイ地帯である。そこは、牛の飼育に最も適し、羊・山羊の飼育にも適している。また、森林が豊かであるので、木材資源、野生動物に恵まれている。このような特徴のある場所は、赤峰市のヒシクテン旗、バーリン右旗、バーリン左旗、通遼市のジャルト旗、興安盟のホルチン右翼中旗、ホルチン右翼前旗、ジャライト旗の、それぞれ興安嶺南の山岳・丘陵地帯である。この地帯を、本稿では、興安嶺南山地と称することにしたい (図1参照)。

## 2. ハラトクチンの集落と経済の概要

1939年当時、満洲国下のハラトクチン部落は、アルホルチン旗を構成する10のノタク

図1 内モンゴルと興安嶺南山地



注：『内蒙古農牧業資源』編纂委員会1966の図9 (75頁) のⅢ<sub>1</sub> (山地森林・草原亜帯) を興安嶺南山地とみなした。

(努図克)の一つハンスム(罕廟) = ノタクに属した。ノタク長の下に百家長が5人おり、各百家長の下に五十家長が2人、十家長が10人いた。ハラトクチンの家は、4人の十家長の下に属していたから、本来40戸から成るが、調査当時ナリン川の谷にいたのは20戸、10家長だけであった。他の20程度の家と3人の十家長は谷の外にいた。興安局が調査したのは、その20戸だけであった。ハラトクチンは「纏った部落の名称ではなく、従って実態調査を行った20戸の家も、相互に有機的な関連を有つものではなく、偶々其の年此の峪間に来り合はせてあつたものとも考へられるであらう」<sup>11)</sup>。興安局の調査の2年前、1937年に満鉄が調査したとき、ハラトクチンには29戸が存在したのである<sup>12)</sup>。

戸別概況表によると、調査した20戸には129人(男62、女67)がいた。全員モンゴル族で、19戸が本旗人、農家番号14<sup>13)</sup>の1戸だけが外旗人である。この家は、7年前に匪賊の攻撃で家財を失い、知合いを頼ってここに來たのであった。20世紀初め、内モンゴル東部に匪賊が跋扈し、牧民は被害を受け、故郷を離れた。これは、漢人農民のステップ開墾や金丹道暴動が清末・民国初にモンゴル人の移住を引き起こした<sup>14)</sup>のと並ぶ、モンゴル人の

表1 ハラトクチン戸別概況表(1939年当時)

農家 番号	家族(人)		経営方式	所有家畜(頭)				寄託家畜(頭)			受託家畜(頭)			耕地(晌)	
	男 62	女 67		牛	馬	羊	山羊	牛	羊	山羊	牛	羊	山羊	占有 面積	耕作 面積
1	5	5	牧(自寄)農(東)	408	134	69	244	124	—	—	—	—	—	21	—
2	4	5	牧(自寄)農(東)	145	276	276	89	56	55	36	—	—	—	9.8	—
3	5	7	牧(自)農(東)	86	75	542	234	—	—	—	—	—	—	11.7	—
4	1	5	牧(自寄)農(東)	44	49	374	81	9	—	—	—	—	—	7	—
5	2	4	牧(自)農(東)	97	7	5	229	—	—	—	—	—	—	8.2	—
6	3	2	牧(自受)農(東)雑	5	3	21	11	—	—	—	63	128	12	4.7	4.7
7	3	2	牧(自受)農(共)	2	1	—	—	—	—	—	32	—	—	4.7	4.7
8	2	1	牧(自)農(共)	20	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	2.3
9	3	2	牧(自受)農(撈)雑	4	—	—	—	—	—	—	26	—	—	—	4.1
10	1	3	牧(自)雇(年)	16	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	3	5	牧(自受)農(共)雇(年)	1	—	—	—	—	—	—	29	—	—	—	3.5
12	2	2	牧(自)農(共)	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3
13	4	6	牧(自受)農(共)雑	7	1	—	—	—	—	—	9	—	—	2.3	2.3
14	4	2	牧(自)農(撈)雇(年)	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.1
15	3	3	牧(受)農(撈共)	—	—	—	—	—	—	—	14	—	—	—	3.5
16	3	2	牧(自受)農(共)雑	4	—	—	—	—	—	—	6	—	—	4.7	4.7
17	2	3	牧(自受)農(撈共)	—	1	—	—	—	—	—	3	—	—	—	4.9
18	9	5	牧(自受)農(撈)雇(月)雑	2	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	4.1
19	2	2	牧(受)農(共)雇(年)	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4.9
20	1	1	牧(自)雇(日)	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	129			869	549	1,287	888	189	55	36	188	128	12	76.4	53.1

注：本表は『阿旗調査報告書』1941の統計篇と竹村茂昭1941の表に基づいて作製したものである。両者の間で数字の違いのある場合、計算違いのある場合があるが、竹村の表に従った。

凡例：牧=牧畜。カッコ内の表記→自=自家牧畜、寄=寄託、受=家畜受託、

農=牧農家が農耕を営んでいること。カッコ内の表記→東=東家(資本主、親方)、自=自作、共=共同耕作、

撈=撈青(小作人)による耕作、雇=雇用労働者

年=年工(1年契約の仕事)、月=月工(月決めの仕事)、日=日工(日雇いの仕事)

晌=晌=15ムー(1ムー=15分の1畝)

移住の理由となった。ハラトクチンにも、その影響が見られたのである。1908年、鳥居龍蔵はハヒル河畔のガブチュ廟 (γabčū süm-e) に宿を借りたが、この廟も廟より上流域(ハラトクチンがある)の牧民もひどく略奪され、山中に逃れていた。そのため鳥居は牧民に接することができなかつたのである<sup>15)</sup>。

興安局の興安省諸地域に対する実態調査の中心人物であった竹村茂昭は、興安省つまり内モンゴル東部の経済形態を、大きく純遊牧、半農半牧、農耕に三分し、半農半牧形態については、遊牧が主、農耕が従の形態(牧主農副形態)と農耕が主、牧畜が従の形態(農主牧副形態)に二分し、牧主農副形態の地域としてアルホルチン旗のハラトクチンを挙げ、説明を加えた<sup>16)</sup>。一方、興安局の『阿旗調査報告書』(および他旗に関する『実態調査報告書』)の例言に掲げてある「調査部落表」には、遊牧、農主牧従、農耕の3経営様式を挙げ、ハラトクチンは遊牧に分類されている。ところが同書の本文には「遊牧を主業とし」「若干の農耕を為し」と記されている<sup>17)</sup>。本文の他の記事を合わせ読むと、そこが牧主農副形態の地域とみられていたことは明らかである。戸別概況表の経営方式の欄をみると、ハラトクチンの全20戸が牧畜に関わっていたが、しかし農耕に関わっていた家も18戸もあった<sup>18)</sup>。すると、本当に牧主農副なのか、半農半牧ではないのか、との疑問が浮かぶ。だが、その農耕というのは「牧畜を営むのに障らない農耕」というものであったから<sup>19)</sup>、牧主農副とみなされたのである。そしてその場合の「牧」とは、上述のように、遊牧であるとみなされていたのである。ここでは、この点だけを確認しておく。そしてまた、ハラトクチンの経済において、牧畜と農耕が営まれていたことも、確認しておきたい。

戸別概況表の6、9、13、16、18番の家の経営方式欄に「雑」とあるのは、大工仕事である<sup>20)</sup>。20戸のうち6戸もこの仕事に関わっていた以上、木工もハラトクチンにおいて意義をもっていたはずである。遊牧民の経済において古来重要であった狩猟は、調査当時ハラトクチンにおいてほとんど行われなかったという<sup>21)</sup>。だが私は、後述するように狩猟も、重要な意義をもっていたと考える。

以下に、牧畜、農耕、狩猟、木工の四つの経済項目を順次検討することによって、ハラトクチンの経済構造を明らかにしたい。

表2 1937年のハラトクチンおよびその近隣地域、阿魯科爾沁旗の家畜数構成

		牛	馬	羊	山羊
ハラトクチン (ハラタクチ)		886	516	434	640
ハラトクチンを含む地域	ガブチュ (カブチ)	10,567	2,324	3,850	9,314
ハラトクチン近隣地域	ハンスム (ハンスーム)	4,896	1,143	1,428	3,529
	ジプト (ジプト)	5,184	1,508	803	5,794
アルホルチン旗		50,316	—	9,584	37,230

注1：『扎旗阿旗調査報告』1939、281-282頁、351-353頁。なお括弧内は、『扎旗阿旗調査報告』1941の表記。アルホルチン旗の項の数字は『阿旗調査報告書』1941による(1937年の家畜統計)。馬の頭数は記されていない。

注2：駱駝、ロバもわずかずついるが、省略した。ただしハラトクチンに駱駝はいない。

### 3. 牧畜

ハラトクチンは既述のとおり、〔山岳〕森林ステップである。〔山岳〕森林ステップは純ステップなどに比べて牛に最も適しているので、表1、表2に示したように、ハラトクチンも小型家畜(羊と山羊)に対する牛の割合が多い。この点、表2に示した近隣地域—ハラトクチンはガブチュ地区管内にあり、ハンスム地区はガブチュ地区の南に接し、ジプト地区はハンスム地区の東に接する—も同様である。ハラトクチンでは、1939年には羊が山羊よりだいぶ多かったが、1937年には逆であった。そして近隣地域も山羊が羊より多いのである。ハラトクチンで1939年に羊が多かった事情は、多分住民構成の変化に求められよう。おそらく1939年後すぐに山羊のほうが多くなったと思われる。1948年以後20年間も、山羊のほうが多かった<sup>22)</sup>。山羊が多いのは、羊より粗放な飼養管理に耐えるからだと言うモンゴル人が多いとのことだが<sup>23)</sup>、この付近が山岳地帯であることも関係していよう。ちなみに同じ頃、アルホルチン旗全体も小型家畜に対する牛の割合が多く、山羊が羊より多かった<sup>24)</sup>。以上の点は、興安嶺南山地の他の旗にも共通した<sup>25)</sup>。ただ羊が山羊より多い旗もある。

これを興安嶺西の純ステップが多いシリングル盟(チャハルは含まれていない)の同じ項の家畜構成と比べると、そこでは牛106,000頭に対し、羊760,000頭、山羊88,000頭で<sup>26)</sup>、牛の割合は13%程度に過ぎず、小型家畜の割合が断然多い。また興安北省(現フルンボイル盟)のホーチンバルガ旗やシネバルガ左右両旗の1938年における調査の結果からは、もっと極端な構成を知ることができる<sup>27)</sup>。

表1をみると、羊と山羊は6戸だけがもち、とくに1~5番戸に偏在している。牛と馬をもつ家は、それぞれ17戸、11戸と多いが、馬は1~4番戸に偏在し、複数所有戸は6戸のみで、他は1頭である。一方牛は、複数所有戸が16戸で、10頭以上が9戸もあり、顕著には偏在していない。牛が最も必要性の高い基本家畜であったことを示す<sup>28)</sup>。ところで10頭以上牛をもつ家は、他家の牛を受託していない。そこでこの程度の牛をもてば、牧畜生活はある程度維持できたのかもしれない。ただし11頭を所有していた14番戸が小作や「年工」も兼ねて行い、15頭を所有していた12番戸が何の副業ももたなかったことからみて、生計自立の条件は15頭程度以上の牛をもつことであつたとみておきたい。

牛がハラトクチンの基本家畜であったことを確認した上で、表1をみると、牛の、馬・羊・山羊よりゆるやかな偏在は、牛のスルグ(sürüg)、つまり寄託(sürüg talbiqu)と受託(sürüg qadayalaqu)によってさらに是正され、牛の少ない家の生計が補われていることが読み取れる。また家畜の多い家が、スルグ以外の仕事も生み出し、牛の少ない家の生計の維持に役立っている<sup>29)</sup>。そこで結局、集落全体の牛または全家畜の多寡、1戸当りの頭数が、ハラトクチンの牧畜経済の水準を示す指標の一つとなる。そして同集落の1戸当り頭数は、牛43.45、馬27.45、羊・山羊108.75である。この数字は、近隣のジプト、ハン

スム、ガブチの平均頭数、牛22.1、馬5.3、羊・山羊26.4に比べて、ハラトクチンがずっと豊かであることを示す<sup>30)</sup>。

興安局の調査によると、ハラトクチンの集落はすべてモンゴル・ゲルから成り、家畜の乏しい2戸のみ、ゲルが固定していた。そして山陰の冬の居所と、そこから遠くて約2km離れた、川の傍の夏の居所とがあった。これらの居所は、家ごとにほぼ一定していた。牧地は、集落を中心として10kmの範囲にあった。冬には、樹枝、柳条などで風よけや家畜囲いを居所に作り、夏には取り払った。家畜の少ない家は、夏の居所と冬の居所と周囲の牧地で1年中過ごし、家畜の多い数戸のみ、冬季以外、集落の西北方25~30kmのホンドロロンに上って過ごした<sup>31)</sup>。旧暦5月頃に移動を開始し、7、8月頃をそこで過ごし、9月に下りはじめ、10月には冬営地付近の丘に帰り、11月頃山陰の冬営地に入った。経路は、ほぼ一定していた<sup>32)</sup>。ホンドロロンに上る家でも、老人や子供は集落に残した。満洲国前は、夏には全戸が一家・家畜を挙げて夏営地に出ていた<sup>33)</sup>。この変化の理由は、住民によると、満洲国になって出された「生活の本拠は常に一定せよと云ふ旗公署の命令」にあった<sup>34)</sup>。

ハラトクチンで基本家畜の牛が少ない家は、冬の居所と夏の居所の往復移動のみをした。集落の10km四方の牧地に夏の牧地と冬の牧地の区別がされていたか否か不明だが、ともかくこの状態が、遊牧の変化によるのでも農耕の影響によるのでもなく、行政側の命令によって生れたとすれば、変化の歴史的必然性を説くことはできないであろう。牧民が行政の命令に服せたのは、家畜が少なく草の条件もよく、集落周辺の牧地の持続的利用が可能だったからである。しかも家畜の多い家が同じ牧地を冬に使っても、問題がなかった。少ない家畜が夏の草の成長期に集落周辺の草を食っても冬に食う草が十分残されていたに違いない。ともかく行政の命令によるものであれ、調査当時、移動性は低まっていたと言えよう。

ハラトクチンの場合同様、中国の土地改革・人民公社設立以前、地域によって差はあるが、少数の富裕戸に家畜が集中し、他の牧戸は、富裕戸に依拠して生活していた。富裕戸と、富裕戸から多く家畜を受託していた家は、家畜が多いので、長距離の季節的移動の必要性が高かったが、他はそうでなかった。

この点、ガブチュ、ハンスムなどのハラトクチン近隣地域も同じであり<sup>35)</sup>、興安嶺南山地のジャルト旗でも、同じであった<sup>36)</sup>。同旗のバヤルトホショー (bayartu qosiyu) 鎮に対する調査でも、同じ結果であった<sup>37)</sup>。夏季に北方興安嶺に上って行き、寒くなると、より低いところに南下する点も同じであった。興安局がハラトクチンの牧畜を遊牧とみていたことは、既述のとおりである。興安局が1940年末に作製した図によれば、ハラトクチンを含むアルホルチン旗北部の牧民の夏の牧地から冬の牧地の移動の方向が図示されている。東隣のジャルト旗北部についても同様である。ともに遊牧が行われていたとみられていたと思われる。同図によると、ヒシクテン旗北部についても同様であった<sup>38)</sup>。

当時興安嶺南山地では、この3旗のみで遊牧とみられるような移動が行われ、他の旗で

は定着的であったらしい。ただしそれらのところでも、かつては冬と夏の牧地の間の季節的往復が行われていた。清末1910年ころのホルチン右翼中旗にその例が見出される<sup>39)</sup>。

興安嶺南山地、さらには内モンゴル東部地域の具体的な牧畜のあり方や遊牧の定着化の過程とそれにとともなう遊牧の変化の状況については詳述せず、別稿に譲りたい。ここでは、当時興安嶺南山地では、牧畜はなお盛んであり、牧民の経済の基盤をなしていたこと、ハラトクチンのように季節的移動のみられた地域と、定着化が進行していた地域が存在していたこと、の2点だけを指摘しておきたい。

#### 4. 農耕

ハラトクチンでは、モンゴル語でnamuy tariy-a、漢語で漫撒子と称される農耕が営まれていた。これは、草原の冬営地付近の適当な場所に、蕎麦か糜子(mongyol [am])の種を播いて犁を入れ(畦を作らない)、その後ほとんど世話をせず秋を待ち、穂を刈って収穫する農法である<sup>40)</sup>。ハラトクチンにおいて、農耕は牧畜を営むのに障らないもの、単に添物に過ぎず、一家の人口を糊すれば足りるから、耕地面積の大小は一家人口の大小に比例するものであって、家の貧富とは何の関係もなく、家の貧富を定めるものは各家の家畜数の多寡による。このようにあくまで牧畜重視なので、集落周辺の肥沃地を耕すことは避けられ、10km余離れた西南の峪間の土地を耕していた。つまりハラトクチンの農耕は、自給程度のものであり、遊牧を妨げず、牧野を侵さぬものであった。そこでハラトクチンを含むアルホルチン旗の「北半は遊牧を主たる経営方式とし農耕は附帯経営に過ぎない」とされた<sup>41)</sup>。ナマクタリヤは、まさに遊牧民の農耕として捉えるべきものである。

興安嶺南山地を含む他の旗でも、ナマクタリヤは清代あるいはその後も行われていた。今、旗志類を参照すると、ヒシクテン旗、バーリンの右旗と左旗、ジャルート旗、ホルチン右翼前旗について、そのことがわかる<sup>42)</sup>。ジャライト旗でも20世紀初頭、西北部山地で行われていた<sup>43)</sup>。ホルチン右翼中旗についても、興安嶺南山地を含めて自足の程度のナマクタリヤが行われてきた<sup>44)</sup>。ジャルート旗の興安嶺南山地でも、1930年代末の調査によるとその収量は少なく、自家消費も充足させられない程度であった<sup>45)</sup>。ホルチン右翼前旗では、1920年代中ごろに、興安嶺南山地に属する帰流河上流域の牧民がナマクタリヤとみてよい農耕を行っていたことが報告されている<sup>46)</sup>。要するに、興安嶺南山地の農耕は、ハラトクチンでも、それ以外のところでも、牧畜の妨げにならないような方法で、自家消費に足る程度の蕎麦、mongyol amの収穫を得るために、行われていたのである。

なおナマクタリヤは、内モンゴル東部一帯で広く行われていたのであり、この地域のモンゴル族の経済を考える上で無視できないものである。詳細は別稿に譲ることにしたい。

#### 5. 狩猟

狩猟について『阿旗調査報告書』には、ハラトクチンでは「ずっと以前に既に其の生産



方法としての重要性を喪ひ漸次忘れ去られんとしてある」とあり、また「民国元二年の頃黄兵（バブチャブの蒙古独立軍の事）の乱の時旗当局より銃器を徴発され、満洲建国後に於ても亦銃器を回収され」、狩猟が實際上ほとんどできなくなったという集落の長老の話も引いている<sup>47)</sup>。同報告の執筆者はその場所で、ベ・ヤ・ウラジーミルツォフの、モンゴル族は最初狩猟を重要な生業として営んでいたが、モンゴル帝国時代以後は遊牧のほうが盛んになり、やがて狩猟は副業あるいは娯楽に過ぎなくなったとの所説を紹介している。当時のハラトクチンの狩猟も、この所説に当てはまる事例とみたのである。ベ・ヤ・ウラジーミルツォフ説の成り立たないことは、私がすでに指摘したとおりである<sup>48)</sup>。興安局の調査では、そのようなウラジーミルツォフの説を念頭に、予断をもって狩猟に関する調査がなされ、猟期でない5月であったこともあって、表面的な聞き取りしか行わなかったのではないかと思われる。

バボジャブの独立運動のさいの銃器回収は、興安局の調査の20年以上も前のことなので、取り上げない。満洲国の銃器回収は、1932年末制定の「暫行銃砲取締規則」に基づき進められたものであり<sup>49)</sup>、ハラトクチンの狩猟に一定の影響を与えたであろう。しかしそれは治安上の措置に伴う一時的なものであり、その後ハラトクチンにおける狩猟の重要性を低下させることは、次に述べるように起らなかった。そしてそのことから、銃器回収以前においても、狩猟が重要であったことをも知ることができるのである。それは、ハラトクチンの周りの山々には野獣が豊かであったのだから、当然であった。

2002年に私が行った調査によると<sup>50)</sup>、ハラトクチンでは、人民公社設立前、狩猟が極めて盛んに行われ、食料用肉の3分の2は狩猟の獲物の肉であった。これによって大切な家畜をあまり殺さないで済んだ。客が来ると少し待たせ、山で狩をして、その肉でもてなした。人民公社時代も、この状態は変わらなかった。狩猟は、満洲国後のハラトクチンで、遊牧に劣らず重要であったのである。具体的に記すと、10月は、主に食料用の獲物を狩った。イノシシ、ノロ (boru görügesü/γur-a jür)、ガゼル (čayan jeger-e、羚羊、黄羊)、野生羊 (aryal uyalja) (1970年代中ごろまでいた)、シカ (buyu suyu。禁猟獣であったが、当時禁令があまり厳しくなかった) が対象であった。これらのうち、イノシシとノロが重要であった。人民公社時代のハラトクチンでは毎年、イノシシは平均して30~40頭、ノロは、40~50頭を殺していた。これらのうち、生産隊の射撃の巧者たちが射撃を委ねられ、名手はひとりでそれらの3分の1前後を射止めた。射撃は、そのような人たちが行ったのであるから、ハラトクチン全体で銃が3、4丁もあれば必要な獲物を射止めるのに十分であったはずである。だから、銃器の回収が行われても、何丁か回収を免れれば、猟に別段支障はなかったはずである。それに猟は、銃がなければできないわけでもない。罠があるからである。罠は種々の獲物に対して用いられ、狼に対しても仕掛けられた。ましてウサギやキツネは銃によって取ることはなく、罠によって取られた。従ってかりに銃器の回収が徹底して、得る獲物が減ったとしても、ほとんど獲ることができなくなったとは考え難い。

要するに、ハラトクチンでは、狩猟は銃器回収によって一時的に打撃を受けることがあったとしても、一貫して経済的に重要であり続けたとみてよい。

ハラトクチンの属するバヤンウンドル・ソムの南隣にあるハーンスム・ソムにおいても、人民公社時代に、冬春季用の肉 (idesi) の3分の1程度を狩猟から得た肉が占めていた<sup>51)</sup>。ジャルト旗の興安嶺南山地に属するゲルチョロー・ソムでも同様であった<sup>52)</sup>。同ソムの東隣にあるバヤルトホショー・ソムでは、狩猟をして獲物の肉を食べていたが、冬春用の肉に占める割合はやや少なかったようである<sup>53)</sup>。ホルチン右翼中旗のバージェルガ・ソムでも冬春の肉の3分の1程度は占めていた<sup>54)</sup>。これらのところでもイノシシ、ノロ、野ウサギ、山ウズラ (yatayu)、キジ (yuryul) などをよく獲って食べていた。イノシシもノロも山林に住む動物であり、興安嶺南山地の獲物を代表するにふさわしい。ガゼルは山地の草原に1940年代あるいは人民公社初期ころまではいたが、その後はなくなった。ステップ・マーモット (tarbay-a) は、いたとしても少なかったようである。その他、畜肉との割合は不明だが、バーリン部でも、シカ属、ウサギ属を狩って食料としていた<sup>55)</sup>。ジャライト旗では1930年代後半に、本旗人は、ただ放牧と打囲 (ここでは狩猟の代名詞—吉田) をこととしてしているとされ、ウサギやガゼル (黄羊)、ノロ (麇子) 等を狩って食していた<sup>56)</sup>。

以上のように興安嶺南山地では、狩猟は、地域差はあったが、経済上無視できぬ意義を有してきた。獲物の肉の利用は、冬春用の肉のために家畜を殺す数を抑制することができ、牧民の家計を助けるものであった。また本稿では述べなかったが、毛皮の商品価値も、一定の意味をもった。なお1980年代半ばに自治区から野生動物保護の通告が出され、本格的に狩猟の規制がはじまり<sup>57)</sup>、状況は大いに变化したことを付言しておきたい。

## 6. 木材伐採と木工

ハラトクチンでは、表1の6、9、13、16、18の家が大工仕事をしていた。表3の家々も林産と関わっていた。20番の家は乾草を集めて売っていたが、柴草も集めて売っていた。これが柴であれば、一応林産に含ませてよいであろう。結局ハラトクチンでは、6、8、9、11~18、20と、集落の半分以上の12戸が林産関係の仕事に関わっていたことになる。

この状況について『阿旗調査報告書』は、「ハラトクチンの西北50支里 (25km—吉田) 余離れたところにバルトなる山があり、白樺、黒樺の森林がある。部落民はこの山に赴き、自由に樹を伐り出し持ち帰って或は車を作り、或は家具を作り、或は之を町に持ち行き (主として罕廟であるが) 穀物、雑貨、日用品と交換してある」と述べ<sup>58)</sup>、「中牧農以下の貧困な牧農家は放牧地帯にあり乍ら畜産収入は得難いから、別個な収入の道を講ずる必要がある」ので、山に入って「木材を伐出し、蒙古車の材料とか燃料材にして之を売ったり、又物々交換に提供する。尚ほ自家の余剰労力で疔痘及牧草を刈って収入を得る事がある。此の部落での此等の方法による収入は全体で142.74円で (中略) 1戸当りは15円86銭であ

表3 ハラトクチンの木材採取と売却

農家番号	林産種類	採取量	売却量	売却価格	売却方法
6	牧草	32車分	2車	1.00円	ホント治安隊に売却
8	樺	120本	30本	12.00	ハーン廟の商人と、糜子3石と交換
			90本	9.00	ハーン廟の商人に売却（細い木材である）
11	樺	6車分	3車分	25.00	ハーン廟の商人と、糜子3石、布1匹半、煙草、酒と交換
12	車輪木材	2車分	1車分	2.40	ハーン廟の商人と、煙草6把と交換
	輪柱木材	6車分	4車分	30.00	ウジュムチン旗の商人と、山羊肉3頭分と交換
14	車輪木材	12本	10本	5.00	付近部落民に売却
	牧車	15車分	15車分	3.00	〃
	疙疸	30車分	30車分	6.00	〃
15	楊柳	1車分	1車分	6.00	ハーン廟のラマ僧に売却
	車の横木	3車分	3車分	12.00	トーテン廟のラマ僧に売却
	楊柳及樺樹	3車分	3車分	20.04	チャバガ廟とハーン廟で行商人と交換
17	樺	74本	74本	7.00	24本を糜子5斗と、50本を5円でハーン廟にて売却
18	車用材	3車分	2車分	10.00	ハーン廟の商人と、糜子2石と交換
20	柴草	2車分	2車分	0.98	付近部落民と、塩14斤と交換
	乾草	5車分	3車分	1.96	〃

注：本表は、『阿旗調査報告書』1941、260-261頁の表を手直したものである。「疙疸」は木の株の燃料。

る。1箇年の総収入（現金収入及物々交換収入評価額）が平均47円08銭である。貧牧農群は40円42銭である。極貧牧農群にあつては大切な収入の道である」と述べている<sup>59)</sup>。これに、13、16番の家の大工収入73円<sup>60)</sup>を加えると、総収入は215円74銭となり、林産関係収入は、もっと増える。

ハラトクチンでは、経済的に中層以下の人々が林産関係の仕事をし、それが重要な収入源であった。だがこの仕事を、「放牧地帯にあり乍ら畜産収入は得難い」ため、生活上やむなく選んだ不本意な手段としてのみ捉えるのは一面的であろう。この集落は、アルホルチン旗でも最も林産に恵まれており、他方木材の乏しい草原地域が南方に控えている。その需要に応えるべく木材を切り出して運んだり、木材を加工したりする人々が現れたのは当然である。その後1980年代には、ハラトクチンの2人を含めて、バヤンウンドル＝ソムに5人のモンゴル人木工がおり、旗の南に行くほど、その数は少なかった。現在旗全体で、モンゴル人木工は、ハラトクチンのゲル造り木工1人だけだろうという<sup>61)</sup>。このように木工が今も残っているのも、ここが林産地だからである。つまりハラトクチンの林産関係の仕事には、地域的特色に立脚している側面を認めなければならないのである。なお、近年における林産関係従事者減少の理由の一つに、ハン山林場の設置も挙げられよう。

木材との関わりは、ハラトクチンと同様の環境をもつ、他の興安嶺南山地においてもみられた。アルホルチン旗北部の東隣りにあるジャルート旗ゲルチョロー＝ソムのノドム＝ガチャーには、現在ゲルを作る人が2、3人おり、かつて車を造る木工も2、3人いた<sup>62)</sup>。ソム中心地にも、現在ゲルを作る木工がいる。ホルチン右翼前旗では、興安嶺南山地に属する帰流河上流域のモンゴル人は、牧畜を営み、農耕（ナマクタリヤー吉田）をするものと

しないものがあるが、洮児河流域の森林から切り出した木材を牛車で洮南（吉林省洮安）に搬出し、また牛車の材料や樺等の木材、穀類をウジユムチンに運んで塩を得ることを副業にしているものが多く、また満洲屯から洮児河に通じる街道の谷間にある小集落や洮児河岸にあるトブスコアイルなどの集落のモンゴル人も牧畜以外に、「貧困なるもののみ木材を洮南に搬出し又牛車の製造をなして生活」していた<sup>63)</sup>。前述したフルンボイルのオールド族も、興安嶺北の木材を伐り出してハイラルに搬出したり、伐り出した木材で車を作ったりして売り、重要な収入源としていたのである<sup>64)</sup>。

## おわりに

おそらく20世紀後半までみられたハラトクチンの伝統的な経済のありかたは、牧畜を基盤とし、その生産物を自家消費や交換・売却に用いつつ、モンゴル人伝統の農耕であるナマクタリヤも自家用のモンゴル＝アムや蕎麦の収穫のために行い、また興安嶺のめぐみである森林の動物を主な対象とする狩猟によって冬春用の十分な肉を確保し、毛皮は売り、伐り出した木材を搬出した木工品を作って売って、必需品を入手するという、複合的な構造をもっていた。これら4種がうまく噛み合って、ハラトクチンの住民の生活は全体として成り立っていたのである。このような経済のありかたは、他の興安嶺南山地にも存在していたのであり、前節で述べたホルチン右翼前旗の帰流河上流域の牧民の経済も、まず間違いなく行っていた狩猟も加えるならば、まさにこのありかたを裏付ける一事例となる。

これらの経済は、どれが進み、どれが遅れているという尺度で評価すべきではなく、内モンゴル東部の自然環境、そしてハラトクチンと他の興安嶺南山地の自然環境に立脚して営まれていたとみるべきである。モンゴル高原では、長い間牧畜と狩猟が経済の二つの柱を構成していた。おそらく清朝時代の途中から、狩猟の役割は低下しはじめたかもしれないが、興安嶺南山地の場合、奥まった地域にあるおかげで、最後まで動物が豊かであり続け、またそこが〔山岳〕森林ステップなので、森林の動物が獲物として多いという特徴がみられた。農耕は、内モンゴル東部のステップの乾燥程度に見合った、そして遊牧を妨げない方法として確立された、モンゴル遊牧民の農法であるナマクタリヤだけが行われてきた。それは、格別興安嶺南山地のみを自然環境を反映した点はなかったようである。ナマクタリヤを遅れたあるいは原始的な農耕であると軽視することは妥当ではない。ステップと遊牧民に適合した農耕として成立し営まれてきたものと見るべきである。繰り返すがこれについて、近く研究を発表する予定である。興安嶺南山地の地理的環境をよく生かしたものとして木材との関わりがあった。これはこの地域の経済を豊かにし、安定させ、外部地域とのつながりを強める要素として機能した。

従来、内モンゴル東部のモンゴル族の経済は、かなり平板に理解されてきたといえよう。狩猟、牧畜、農耕という順序の経済と社会の発展段階を念頭に、遊牧は後進的・原始的なもの、狩猟は衰えるべきもの、農耕は盛んになるべきものという観点から、モンゴルの経

済と社会が分析されてきた。ウラジーミルツォフの影響が濃厚に見られる興安局の実態調査報告は、まさにそうであった。このような観点に立つ研究は、その後も多く見られる。この見方に立つと、ステップのある地域に牧畜、狩猟、農耕が並存する状態を説明することは困難である。かくてナマクタリヤは原始的な農耕と蔑視され、狩猟や木材・木工関係の仕事を貧乏な牧民の行うものと片付けられてきた。私はこれに対して、自然環境の差異によって、当然地域的な経済の特徴が生じるはずであり、そのことが、モンゴル高原の遊牧民の経済そして歴史を内容豊かなものとしてきたのであり、興安嶺南山地の経済は、そのような観点から説明すると、よく理解できると考える。

私は、かつてモンゴル国のハンガイ地帯と内モンゴルの陰山山脈地域の山岳森林ステップを、水草・野生動物・木材に恵まれ、遊牧・狩猟に最適であり、木材による日用品や戦争用具の作製が容易であるなどの理由によって、遊牧民によって拠るべき場所と意識され、強大な遊牧国家の根拠地が、しばしばこれらの地域に置かれ、歴史的に重要な意義をもち続けたと述べた<sup>65)</sup>。その後、山岳森林ステップと純ステップのそれに隣接する部分が、遊牧民にとって最も良好な環境であるとしたほうがよいと考えるようになったが、ともかく、興安嶺南部地域とそれに隣接する平原は、上述した二つの地域と類似した環境をもち、強大な契丹政権の根拠地の置かれた今のバーリン左旗の地もその一郭を占める。これによっても、興安嶺南山地の意義の一端を理解することができると思われる。

[本稿は21世紀COEプログラム「アジア地域文化エンハンシング研究センター」の研究成果の一部である]

## 注

- 1) 『阿旗調査報告書』1941、2頁。
- 2) 『扎旗阿旗調査報告』1939、23頁、230頁、284頁、付図など。
- 3) ハラトクチンは本来、本集落そばのqartayčïn ayulal山の名に由来するらしい。qartayčïn はqar-a toyčïnが訛った形だろうとされる (Qoduringy-a 1997、203-204頁)。
- 4) 吉田順一 2001、36-42頁。
- 5) 中国農業部畜牧獣医司・全国畜牧獣医総站1996、412-413頁。なお内蒙古草地資源編纂委員会 1990、354-363頁参照。バイカル=ハネガヤはモンゴル語で [bayiyal] kilayan-aという (öbür mongyol-un baysi-yin degedü suryayuli/öbür mongyol-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a 1977、172頁)。
- 6) 内蒙古草地資源編纂委員会1990、363頁。
- 7) 扈明閣主編 1990、229-231頁。öbür mongyol-un baysi-yin degedü suryayuli/öbür mongyol-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a 1977、1566頁。
- 8) 『扎旗阿旗調査報告』1939、170頁。
- 9) 『阿魯科爾沁旗地名志』465頁。
- 10) 烏居龍蔵 1975、98頁。興安嶺南の他の山地の森林も、往時は現在よりだいぶよかったのであ

- り、それが森林が後退して、現在の森林の分布状況となっているとみななければならない。
- 11) 『阿旗調査報告書』1941、32-33頁。ハラトクチンにいた十家長とは、農家番号12であった。
  - 12) 『扎旗阿旗調査報告』1939、309頁。満鉄はハラトクチンを嘎查(ガチャー)名としている。
  - 13) 農家番号とは、調査対象集落各戸の識別番号である。本集落では「牧戸番号」とすべきもの。
  - 14) プレンサイン2003、第4章。
  - 15) 鳥居龍蔵1975、95-98頁。鳥居は、ハヒル川を遡りアスルンタバ、マラガインタバを通った(タバはdabay-aで峠の意。前者はバルス峠の誤り)。私も2002年に、この集落からハヒル川を遡り両峠を経て西ウジュムチンに出た。鳥居は間違いなくこの集落を通ったのである。
  - 16) 竹村茂昭1941、60-75頁。
  - 17) 原文に「若干の農耕地を為し」とあるが、文意からして「農耕」の誤りなので、訂正した。
  - 18) 他の2戸の、10番は他家の家畜の放牧、20番は他家の雑用をしていた(『阿旗調査報告書』1941、235頁、238頁)。20番は廟丁なので、年にひと月所属の寺で働いていた(竹村茂昭1941、68頁)。
  - 19) 『阿旗調査報告書』1941、129頁。
  - 20) 『阿旗調査報告書』1941、67頁、133頁。同統計篇第3「家族構成表」の備考欄参照。
  - 21) 『阿旗調査報告書』1941、93頁。
  - 22) [bayanöndür günşe] teüke-yin materiyal-i emkidkekü bay-a duγuyilang 1978、45-46頁。ハラトクチンを含むシャルボド生産大隊の統計記録に従う。1948年だけは羊のほうが多かった。
  - 23) 『扎旗阿旗調査報告』1939、213頁。
  - 24) 『阿旗調査報告書』1941、105、117頁。このあり方は、戦後も同様であった。ただし1978年以後は、羊が山羊より多くなった(『阿魯科爾沁旗志』1994、348-350頁)。
  - 25) 満洲国興農部畜産司1939など参照。
  - 26) 『蒙古地域種類別家畜頭数表』1942。
  - 27) 興安局調査科1939、21頁、159-161頁、276頁。
  - 28) 『阿旗調査報告書』1941、158頁。牛以外の家畜の富裕層への偏在は、ハラトクチンだけの特徴ではない(同、213頁)。
  - 29) 寄託と受託については、『阿旗調査報告書』1941の第3編第5章、第7章参照。
  - 30) 『扎旗阿旗調査報告』1939、214頁
  - 31) ホンドロン(köndelen)のことで、注(15)のバルス峠とマラガ峠(西ウジュムチン旗との境界)の間に横たわる谷。実際には東西に細長く、12~13 kmある。今も夏営地として使われている。
  - 32) 興安局の調査では4戸のみ長距離の季節的移動をしていたが(『阿旗調査報告書』1941、79頁)、満鉄の調査では9戸であった(同、230頁)。基礎となる戸の数の差による違いであろう。
  - 33) 『阿旗調査報告書』1941、60-61頁。竹村茂昭1941は、中華民国ころからとする(64頁)。
  - 34) 本段落は、『阿旗調査報告書』1941、60-61頁、64-65頁、79-81頁に基づく。
  - 35) 『扎旗阿旗調査報告』1939、213頁、230頁など。
  - 36) 『扎旗阿旗調査報告』1939、198頁、205-206頁など。
  - 37) 2002年12月調査。対象者：女(75歳)。
  - 38) 国務院興安局調査科1940。この図は、飯塚浩二1972に、2色刷りで縮刷されて収められている。原本は多色刷りである。
  - 39) 程厚・郭文田[戎莫勒1998の218-220頁を参照]の「牧畜」の項に、「夏秋両季は〔畜〕群を河

- 泊——霍勒河兩岸等——に移し水草に就かせ、冬は、氷をして結ばしむれば、元通り各屯に回へる」とある。
- 40) 竹村茂昭1941、66頁。『阿旗調査報告書』1941、53頁、54頁。
- 41) 以上、『阿旗調査報告書』1941、79頁、86頁、129頁、133頁。
- 42) 赤峰市地方志編纂委員会1996、683頁。『巴林右旗志』編纂委員会1990、221頁。『巴林左旗志』編纂委員会1985、101頁。『扎魯特旗志』編纂委員会2001、113頁。『科爾沁右翼前旗志』編纂委員会1991、293頁。
- 43) 柏原・濱田1919、571頁。王府付近でも1925年ころまでナマクタリヤが存在していた（興安局1939、49頁）。
- 44) 関東都督府陸軍部1908、430頁、494頁。内海右一郎1927、57頁。
- 45) 『扎旗阿旗調査報告』1939、32頁、194頁。
- 46) 坪井清1926、8頁。
- 47) 『阿旗調査報告書』1941、93頁。
- 48) 吉田順一1981、103-116頁。
- 49) 『満洲国史』編纂委員会1970、329-330頁。『満洲国史』編纂委員会1971、248頁。
- 50) 2002年8月調査。対象者：男（71歳）。
- 51) 2003年10月調査。対象者：男（65歳）。
- 52) 2003年10月調査。対象者：男（85歳）。
- 53) 2003年10月調査。対象者：男（66歳）、男（75歳）。
- 54) 2003年10月調査。対象者：男（70歳）。
- 55) 柏原・濱田1919、689頁。
- 56) 土屋定国1937、25頁、119頁。当時ジャライトの本旗人は、自らは農耕せず、漢人か外旗人に小作させて農耕をしていた。
- 57) 『科爾沁右翼前旗志』編纂委員会1991、354頁。
- 58) 『阿旗調査報告書』1941、67頁。なお鳥居龍蔵は、1908年にハヒル川を遡りアスルン峠を越えて西ウジユムチンに出たが、興安嶺山頂付近の、主に樺、柏等の木が多く伐られており、「樺は蒙古人等の車、又は曲物に作るに用いるものなり」と記した（鳥居龍蔵1975、99頁）。
- 59) 『阿旗調査報告書』1941、260頁。
- 60) 『阿旗調査報告書』1941、統計篇「第22現銀収支表（収入ノ部）」
- 61) 2002年8月調査。対象者：男（45歳）。この人物はゲル造りの大工である。
- 62) 2003年10月調査。対象者：男（85歳）。
- 63) 坪井清1926、10-11頁。
- 64) 吉田順一2001、36-42頁。
- 65) 吉田順一1980。この論文で陰山において森林は山の南斜面を中心に草原が北斜面に発達していたと記したのは（54頁）、それぞれ北斜面、南斜面と改めたい。なお農耕は、これらの地域で行われていたわけではない。

## 略号・文献目録

〔略号〕（五十音順）

『阿旗調査報告書』または『阿旗調査報告書』1941. = 興安局1941.

『扎旗阿旗調査報告』1939. = 満鉄調査部1939.

〔日本語文献〕(五十音順)

飯塚浩二1972. 『満蒙紀行』筑摩書房。

内海右一郎1927. 『凶什業凶王旗事情』満鉄庶務部調査課。

柏原・濱田1919. 柏原孝久・濱田純一『蒙古地誌』下巻、富山房。

関東都督府陸軍部1908. 『東部蒙古志草稿』下巻、関東都督府陸軍部。

興安局1939? 『興安南省扎賚特旗実態調査報告書』(実態調査資料第4輯)、興安局。

興安局1941. 『興安西省阿魯科爾沁旗実態調査報告書』(実態調査資料第1輯)、興安局。

興安局調査科1939. 『興安北省に於ける牧野並放牧慣行調査報告』、興安局。

國務院興安局調査科1940. 『満洲帝国旧蒙古地带民族分布図』、興安局。

竹村茂昭1941. 「蒙古民族の農牧生活の実態」、『食料経済』7-10、東亜研究所第5調査委員会。

土屋定国1937. 『興安南省扎賚特旗事情』(満洲帝国地方事情大系L第8号)、満洲帝国地方事情大系刊行会。

坪井清1926. 『洮南満洲里間蒙古調査報告書(第一班)第四編-畜産業』、満鉄。

鳥居龍蔵1975. 「蒙古旅行」、『鳥居龍蔵全集』9、朝日新聞社。

ブレンサイン2003. ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、風間書房。

編者不祥1942. 『蒙古地域種類別家畜頭数表(成紀736年)』(江口圭一蔵「沼野英不二旧蔵資料」)。

満洲国興農部畜産司1939. 『家畜家禽統計』3。

満洲国史編纂刊行会1970. 『満洲国史』総論、満蒙同胞援護会。

満洲国史編纂刊行会1971. 『満洲国史』各論、満蒙同胞援護会。

満鉄調査部1939. 『興安西省扎魯特旗・阿魯科爾沁旗畜産調査報告』(産業調査資料第58編)、満鉄。

吉田順一1980. 「ハンガイと陰山」、『史観』102、早稲田大学史学会。

吉田順一1981. 「モンゴル族の遊牧と狩猟—11~13世紀の時代を中心に」、『東洋史研究』40-3、東洋史研究会。

吉田順一2001. 『エヴェンキ族自治旗イミン・ソムのオールド族の牧畜』、平成10年度~12年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書『近現代内モンゴル牧畜社会の研究』。

〔モンゴル語文献〕(アルファベット順)

öbür mongyol-un baysi-yin degedü surγayuli/öbür mongyol-un surγan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a  
1977. *üretü urγumal-un jiruγtu toli, köke qota.*

Qoduringy-a, 1997, *aru qorčïn-u ayula usu, dongliao.*

〔モンゴル語・漢語併用文献〕(アルファベット順)

aru qorčïn qosiyun-u arad-un jasay-un orun 1988. *aru qorčïn qosiyun-u γajar-un neres-ün temdeglel*  
(阿魯科爾沁旗人民政府『阿魯科爾沁旗地名志』), *ulayan qada.*



[*bayanöndür gūnše*] *teūke-yin materiyal-i emkidkekü bay-a duγuyilang* 1978. [*bayanöndür gūngše*] *toγ-a būridkel-ün materiyal* (『[巴彦温都勒公社] 統計資料』), *bayanöndür gūngše*.

[漢語文献] (五十音順)

『阿魯科爾沁旗志』編纂委員会1994. 『阿魯科爾沁旗志』、呼和浩特。

『科爾沁右翼前旗志』編纂委員会1991. 『科爾沁右翼前旗志』、呼和浩特。

『扎魯特旗志』編纂委員会2001. 『扎魯特旗志』、北京。

赤峰市地方志編纂委員会1996. 『赤峰市志』上、呼和浩特。

中国農業部畜牧獸医司・全国畜牧獸医総站1996. 『中国草地資源』、北京。

程厚・郭文田1910. 『科爾沁右翼中図什業図親王旗調査書』。

戎莫勒1998. 『建国前内蒙古方志考述』、呼和浩特。

『内蒙古草地資源』編纂委員会1990. 『内蒙古草地資源』、呼和浩特。

『内蒙古農牧業資源』編纂委員会1966. 『内蒙古農牧業資源』、呼和浩特。

『巴林右旗志』編纂委員会1990. 『巴林右旗志』、呼和浩特。

『巴林左旗志』編纂委員会1965. 『巴林左旗志』、赤峰市巴林左旗。

扈明閣主編1990. 『赤峰草地』、北京。

**キーワード** 内モンゴル東部 興安嶺南山地 森林ステップ ハラトクチン 牧畜  
農耕 狩猟 木材運搬と木工 興安局の実態調査

(Jun'ichi YOSHIDA)